



佐賀県も梅雨入りをし、ちょっと鬱陶しい日が続きます。今月になってコロナウイルス感染症が佐賀県でも急速に拡大しています。先生方には5月12日（水）に予定していた「第1回 弱視学級担当者等研修会」を直前で延期してしまい、大変申し訳なく思っております。現在、状況を見ながら、代替日を検討中です。決定次第お知らせしますが、それまではこの「ゆうあい net」や巡回相談、電話やメールでの個別相談を中心に先生方のサポートを行っていかれたらと考えております。

## 先生方のご質問より

今回、予定していた研修会に参加希望をしていた先生方に、お困りのことや質問などをお尋ねしていました。いただいたもののうち、いくつかを、こちらからの答えも含めて記します。実際は質問していただいた先生方の担当されている児童生徒を対象にした内容ですが、一般的な内容に変えているものもあります。

困っていることの内容	方向性
<p>自立活動について、どのような学習内容にすればよいのか。</p>	<p>自立活動で取り扱う内容は、児童生徒一人ひとりの実態で変わってきます。そのため、まずは実態把握やニーズの確認を行いましょう。その後、どのような学習を行っていくのかを考えます。また、学習指導要領自立活動編を繰り返し読むことも勧めます。</p> <p>自立活動については別の機会に詳しくお知らせしたいと思います。</p>
<p>できるだけ交流学級で一緒に勉強させてほしいという保護者の思いへの寄り添い方</p>	<p>交流学級で学習する上で、児童生徒がどんなことに困っているかということやどんな配慮を望んでいるか、また、どんなことを身につけたら、スムーズに学習できるかという視点から、本人や保護者と話し合いをしてみてもはどうでしょうか。目的がはっきりすれば本人の学習への意欲や保護者の理解も違って来るかもしれません。</p>

ルーペをもっと使ってほしいが、あまり便利と感じていないのか、進んで使おうとしない。

ルーペや単眼鏡といった視覚補助具は、一人ひとりの見え方や状況によって、倍率や形態が選定されます。また、有効に使うためには練習も必要です。ルーペなどを使おうとしない場合の理由はいろいろ考えられますが、その中の一つに有効性を感じられないからというものがあります。持っているルーペが本当に適したものなのか（汎用のルーペを使って、よく見えないということも多くあります）、正しい使い方をしているかなどを確認した方が良いかもしれません。

算数や理科、社会での折れ線グラフや地図の読み取りが難しい。グラフなどの資料を拡大コピーしたり、色付けしたりしているが読みにくそうにしている。

小学校中学年以上になると、グラフや地図の読み取りが難しいという声をよく聞きます。様々な要素が複雑に入り組んだグラフや地図は、見えにくさのある児童生徒にとっては、正しく読み取ることが難しいことが多く、がんばりすぎて疲れてしまうことも多いようです。

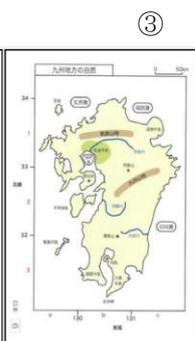
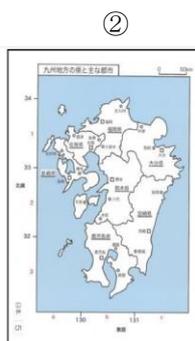
拡大や色付け等の編集は、見えやすくするための大事な方法です。その時に心がけておいていただきたいのが、情報の選択です。どの情報をクローズアップし、どの情報を削るか、それによって児童生徒の負担はずいぶん違ってきます。下記は帝国書院の通常地図帳における九州地図（①）と同じ帝国書院の「みんなの地図帳」という見えにくさへの配慮をした地図帳（②③④）における九州地図です。

目的に応じて思い切った情報の選択をされていることがわかります。これにより見えやすさが向上し、学習しやすくなっています。このように学習内容に応じて、本当に知らせたい情報を中心に考え、児童生徒の声を取り入れながら、効果的な編集を行ってみてはどうでしょうか。

#### ○日本地図の部

8 地方区分ごとに、「都道府県と主な都市」「自然」「両方の要素を載せた地図」の3枚ずつがあります。「都道府県と主な都市」の地図は、原則として、各都道府県の県庁所在地と人口第3位までの都市を掲載しましたが、一部の県については学習上必要と思われる基本的な都市名を追加して掲載しています。「自然」は小・中・高等学校で学習する基本的な項目を掲載しました。「両方の要素を載せた地図」は、上記2つの地図を重ね合わせた形になっています。ただし、要素が重なり読みづらくなることのないように、一部調整をしています。

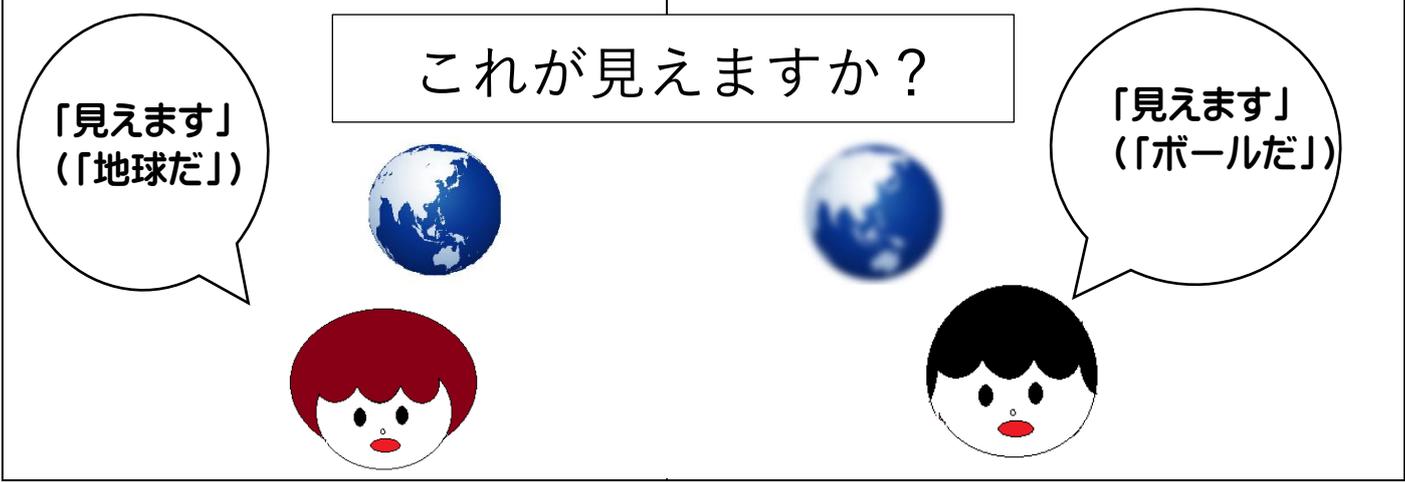
日本地図の部では各地図の枠線の右上に、地図ごとに大まかな縮尺を示しています。

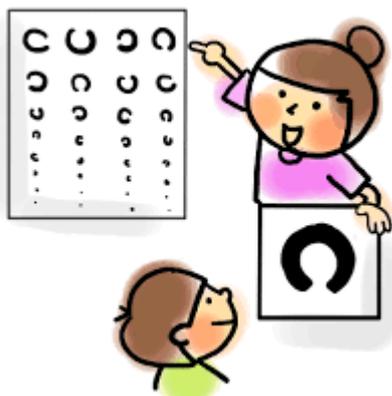


<p>「部分」と「全体」を見ることが苦手。          ビジョントレーニングの中でも「部分」「全体」を行き来しながら捉える訓練になるものを探しているがなかなか見つからない。          また、分度器を使った角度を書く問題など、分度器の使い方は理解していても、頂点を逆にとったり、内側外側の目盛りを読み違えたりしている。</p>	<p>対象年齢は7歳11か月までですが、フロスティック視知覚能力促進法の視知覚学習ブックの中にも直接書き込む練習問題があります。発達段階によっては学習効果が得られるかもしれません。          また、関西発達臨床研究会のサイトにもヒントになりそうな教材があげられています。          (<a href="http://takanami.capoo.jp/kansai/usagawa.htm">http://takanami.capoo.jp/kansai/usagawa.htm</a>)          なお、分度器については、見えにくさに配慮された分度器の使用や実態に応じて分度器を使わずに角度を計測したり（概数的にはなりますが）、作図をしたりすることも検討されてみてはどうでしょうか。</p>
---	--

<p>語彙数を増やすため、読書指導を進めたいが、難しい。興味のあるアニメにかかわる本は図書館で借りている。読書に興味を持ってもらうため、拡大読書器などの体験も良いかと思っているが、どこに相談してよいかわからない。</p>	<p>本が好きになってほしいということなら、好きなアニメ等の本をたくさん読ませてあげればよいと思います。ただ、語彙数の獲得と読書に興味を持たせるのは別と考えた方がよいと思います。語彙を増やすのはアニメ等に関する会話や読み聞かせなど、様々な手段で可能になると思われしますので、児童生徒の興味や関心をもとに考えてみてはどうでしょうか。          拡大読書器については使用する際に、練習も必要になりますし、据え置き型だと気軽に使うこともできないので、趣味の読書には不向きかと思われる。</p>
--	---

<p>本人から「見えにくい」という訴えがほとんどないことを心配している。「見えにくいのではないか」という予測だけで対応しており、不安を感じている。</p>	<p>生まれつき、見えにくさのある児童生徒は、見えにくい状態を普通ととらえていることが良くあります。そのため、子どもたちがどう見えているかを把握することと、本当に見えている状態を知らせてあげるのは、とても大切なことです。</p>
---	--





このように見えにくさのある児童生徒にとって「見える」と「わかる（判読できる）」は違う時があります。特に年齢が低い場合は鮮明に見えた経験が少ないため、私たちが「ぼんやり見える」と感じることを「見える」と感じていることもあります。また、「見えないことがいけないこと」のように思い、本当はわからないのに「見える」と言うこともありますし、ある部分はわかるけれど、他の部分はわからない時でも「見える」ということもあります。

学習をする際には「見えるか見えないか」ではなく、「どの程度の精度で見えているか」ということが大切になります。そのため、様々な機会をとらえて、どのくらい見えているのかということ把握していきましょう。

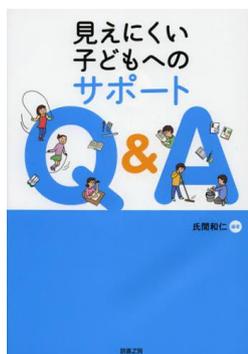
## おすすめの書籍です



### 「視覚障害教育に携わる方のために」

香川邦生、他  
慶應大学義塾出版会

目の機能の解説や視覚障害の歴史、教育課程や自立活動のあり方、そして各教科の指導や教材教具についてまで、幅広く紹介をされています。視覚障害教育に必要な知識や情報が得られる本だと思います。



### 「見えにくい子どもへのサポート Q&A」

氏間和仁  
読書工房

弱視の子ども基本的な知識や特性、支援の方法だけではなく、転入学のことや年度初めに気をつけること、登下校や授業での具体的な支援まで Q&A 方式で説明がされています。編者は視覚障害者の ICT にも造詣が深いので、タブレット端末についての事例などもあげてあります。